

地質史が示す現代への警告

多々良 省 三

生物の学術命名法を確立した碩学、カールリンネ Karl Von Linne は、われわれ人類にホモサピエンス Homo Sapiens, L. という動物としての学名を与えた。ホモは人、サピエンスは「智恵ある、賢い」を意味する言葉である。

ホモなる哺乳動物は手の自由を得てサピエンスなるが故に他の動物仲間を圧倒し、今では比類のない高度な文化を持つにいたった。

ここに到達した第一の原因は「もゆる火」をわが物としたことにある。恐ろしい長い夜がくると、洞窟の入口にあかあかと燃えるかがり火は、われわれの祖先を猛獣毒蛇の脅威から守り、内には老若男女が安らかに眠りえたことであろう。

屈強な若者は炎天下に、彼が発明した石斧をふるって山野に鹿を追い、女たちは粘土をぬって乾した木の枝に肉をのせて火にかざし一家の食事をととのえる、彼の女はふと、焼けた粘土の硬化に驚きの叫びをあげる、土器はこうして発明されたのかとも思われる。

火を用いて銅をとかし鉄をきたえ、発明は発明を生んでいった。今日、虹を画いて大空を切る火矢のジェット機も、宇宙をかける人工衛星も、さかのぼれば、はじめて棒切れに石をくくりつけることに思いいたったわれわれ祖先の原始発明者のささやかな遺物にその端を発していると考えべきであろう。

人類文化の歴史を省みるとき、直立猿人の化石出現は大約百万年、原始人類の化石が十数万年、洞窟を出て部落をつくりはじめたのが約一万年前といわれ、遺跡がみられるのが紀元前五千五百年である。その後ギリシャ哲学に次いで科学が興り、興亡盛衰二千年、そして科学と工業技術とが相

助けて今日の文化をみたのは近々百年間の成果であり、大空を完制し電波を大衆化したのはここ三、四十年宇宙に発展し始めたのはわずか十年來のことであって、このような急ピッチの発達はその止まるところを知らない。しかもわれわれ人類は今『第三の火』原子力を手にしている。

かつてのもゆる火は五感の内であった。新たなる火は五感の外にはみだしている。

ここでわれわれが省みねばならない重大な事実がある。それはかつて動物学の大先輩、丘浅次郎博士の指摘された動物の地質史であって、化石生物の数ある消長のうち、彼等の持つ天与の攻撃具が異状な発達をとげた極において、忽然としてその種属が絶滅しているものが少なからずあることである。頭骨に倍する偉大な牙を持った劔牙虎や、両角の幅が四メートル、重さが頭骨とも百キログラム以上もある大角トナカイなどが有名である。これらが化石となって発見される地層の新古に従って、はじめのうちはさほど顕著ではないが次第に顕著な発達を示し、やがて急ピッチをもって異状な発達の極に達すると忽然として其姿を消し、以後の地層からはたえてそのかげも無く、確然とその種属の絶滅を明示しているのである。

何故絶滅したか、博士は次のようにこれを説明して居られた。これらの動物は優秀な天与の武器である牙や角を用いて他の種属を次第に圧倒して行くうち益々それが発達し、終に他の種属を完全に壊滅してしまつて、彼等がその地方をわがもの顔に繁殖横行する。しかしこの状態もつかのまで、やがで食物環境の不足から彼等同種属の間に闘争がはじまる。

この場合も当然かつて他種属を征服してきた偉大な牙、巨大な角を一層はげしく用いたであろうから、その発達も異常な急ピッチを示すことはいうまでもない。かくして極端に発達した武器をもって血みどろの暴力死闘を続けているうち、この異状発達の反面、大自然は二兎を許さない原則、例えば電気鰻が成魚となつて、その電気知覚が完成する頃になると、幼魚時代にぱっちり開いていた眼が退化して、全くの盲目となつてしまうなどの例にもれず、彼等の体格には当然起る不均衡の結果、その体のどこかに

異常な弱点を生ずるにいたり、今まで思いもよらなかった弱小な外敵の為にその虚を突かれてそれらの好餌となり、もろくも短期間に此世から絶滅し去ってしまったものであるといわれているのである。

博士はこの事実を人類にたとえて切々と警告を述べられたのは大正の中頃であったかと思う。その頃学生であった私は、大きな興味とともに、一抹の淋しさを感じていたものであったが、今日それを想い返して慄然たらざるをえないのである。

博士は人類智能の異常な発達の反面として生活力全般の病弱化、生殖力の低下、頭部過大による出産の危険性などを挙げておられた、もてはやされる八頭身のヌードも、ケニアの荒野に一人放たれたとしたら明かに最弱の動物でしかありえまい。

このような人類が、今日『第三の火』原子力を手にしてそれが出す死の灰におののいている。しかも其の残虐なる洗礼を第一番に受けて平和に目醒めたのはどの民族であったか。

絶滅していった野獣どもは已を省みるいとまもあらばこそ、暴力に死闘を重ね、闘争に終始して消え去って行った。戦争は最大の暴力である。1～2発の水爆は最大の海洋を染め、全世界の大気を変貌させてしまった。これを無制限に打ち合ったらどうなるか、人類の絶滅はおろか全生命の絶滅にならないとはたれが保証できるであろう。

われわれ人類の祖先がはじめて燃ゆる火を手にした頃にはその取扱いもつたなく、時には野火を出し、山火事を起してさながらこの世もろとも焼き尽されてしまうかと恐れおののいたこともあったであろう。

原子力も恐るることはない、天与の叡智に照してサピエンスに善用すれば、此世界は末永く新たなるパラダイスを顕現するであろう。

絶滅して消えた野獣どもと異るところは、我々人類は智力によって以上の事実を予知し得ていることである。

絶滅の巖頭に立つ人類は、今こそ暴力と闘争の野獣性から超脱して叡智の示す『新しき大平和の世界』を実現せねばならぬ時代に処しているので

ある。

このときにあたって、同胞よ、世界全人類よ『ホモよサピエンスなれ』
と切に祈って止まないものである。